

# 共に学び、お腹を満たす空間

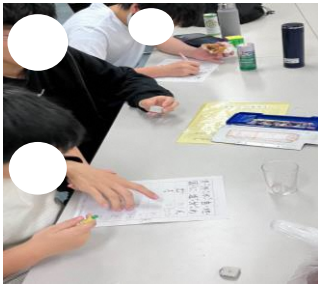


写真1：「学習会」小学生は学校の宿題をし、それに対して大学生ボランティアが勉強を教える。

## 子どもが集う 第三の居場所

〈取材先〉  
弘前☆  
子ども応援隊  
マザーフィールド



### 子どもの放課後の過ごし方

#### ○子ども食堂って？

子ども食堂は、子どもが一人でも行ける無料または低額の食堂だ。また、子どもへの食事提供から孤食の解消や食育、地域の交流の場などの役割を果たす。よって、「子どもの貧困対策」と「地域の交流拠点」の二つが活動の柱となる。

一方で、子ども食堂は民間発の自立的かつ自発的な取り組みで、二〇二〇年に東京都大田区の八百屋の取り組みがはじめてとされている。子ども食堂が誕生してから現在、全国約七千三百箇所を超えた。また、認定NPO法人全国子ども食堂支援センターの調査によると、国民の八割が「子ども食堂という言葉を知っている」と回答。全国的に知名度が向上している社会活動となっている。

#### ○子ども前の未来を繋ぐ マザーフィールド

経済団体である弘前商工会議所で弘前市内のひとり親家庭の子育てと仕事の両立を支援している団体だ。学習支援や食支援、生活向上支援、就労支援、子育て支援を行う。また、イベント開催もあり、バス遠足やクリスマス会、親子で料理教室なども行われる。

マザーフィールドは現在、毎週水曜日の十八時から学習会、隔週で十七時半から食事会も開催している。参加対象者はひとり親家庭の子どもだが、調査時（二〇二三年八月・九月）では、両親を持つ子どももいた。九月六日（水）の参加者は小学生二人・中学生二人で、彼らは毎週この場所に訪れる。小学生は同じ学校の同級生で、そのうち一人は中学生の姉と参加していた。また、活動時間は設けられているが、自分の行きたい時間に自由に参加することが可能だ。参加者は活動場所に来ると、大きな声で「こんにちわ！」とあいさつをする。ボランティアとして参加している人たちの名前をファーストネームで呼び、学校であった出来事について楽しそうに語り始める。彼らは、嫌な出来事もボランティアの人に相談をする。

マザーフィールドは、自分や他人の意見を尊重することができる場所であった。また、子どもとボランティアは敬語で会話をするが、子どもとボランティアはいわゆるタメ口で話し合える。ここでは、年齢の壁を感じない空間が構築されていた。また、ほとんど同じ参加者同士が顔見知りであることから、友好関係も築かれていた。

#### ○学習会と食事会の様子はこちら！

まず、学習会では各学校で出された宿題を持参し、それに取り組む。小学生は毎回プリントなどの宿題をし、中学生は定期考査の勉強をする。その勉強をする必要がない日には小学生に問題のヒントを教えたり保護者の代わりに丸付けをしていたりする。同じことを大学生ボランティアもやっている。彼らは、弘前大学のサークルの一環で活動をしている、子ども好きな学生だ。子どもは学生に「ここ分かんない、なんだけこれ？」と気軽に話しかけ、学生はホワイトボードに絵を描きながら分かりやすく解説を行う。

マザーフィールドは、子どもに大学進学をする夢を与えるために弘大生のボランティアを募集している。このことは、「ひとり親家庭の子ども達が、学力の面で格差が生じないように」にすることを目標に掲げる、彼らにとって重要なことだ。子どもに対して学生が身近に感じられると共に勉強を教えてもらえる環境は、学力向上の機会や気軽に話しかける関係を築き上げる。そうすることで、その環境は子どもにとって学生が身近であり憧れの存在にもなっている。一方で、スマートフォンやゲームなどの使用は禁止だ。それらの使用は、集中力の低下や学習意欲の軽減など学習の妨げになるからだ。宿題が終わった折紙、運営側が事前準備したボードゲームや折り紙など開催終了時間まで遊ぶ。

次に、食事会はバイキング形式で食事を提供する。子どもの孤食を減らす目的だ。献立は、白米・主菜・副菜・汁物が基本となっている。米研の方がその献立の品名や栄養素、料理の豆知識など子どもに食育を行う。食事は、参加者の一人が代表で「いただきます」を言いつつその後全員で復唱し食べ始める。参加者と学生ボランティア・地域ボランティアのその日にいる全員でテーブルに向かい合い食事をする。余った食べ物は持ち帰りたい人がタッパーに詰めて後で食べるため、食品ロスの問題を起こさない工夫がされていた。また、弘前おてらおやつクラブからはお菓子やご飯などが提供され参加者に分配されていた。

#### ○スケジュール

- 〈学習会〉
- 18:00 学習会
- 19:30 子ども帰宅
- 〈食事会〉
- 17:30 食事会
- 18:00 学習会
- 19:30 子ども帰宅



写真2：「食事会」バイキング形式で各自、料理を盛り付ける。

#### ○編集後記

子どもとボランティアの距離感と親しみやすさは、マザーフィールド特有の環境であり継続的に利用できる子ども居場所となっていると考えられる。しかし、子どもにとっては居場所として確立しているが、運営側にとっては学習の場とされている。学習会に力を入れた一方で、子どもにとって遊びや友達に会う、食事などの目的で利用されている現状だ。今回はマザーフィールドの調査であったが、子どもにとって経済面や行動範囲などの制約がある中での第三の居場所について多くの人が理解することが大切だ。このような活動が周知され、それに心をもち地域全体で取り組むことが求められる。

内沢杏那